

俳系における芭蕉の意義

平島, 順子

<https://doi.org/10.15017/4741987>

出版情報 : 雅俗. 10, pp.127-147, 2003-02-25. 雅俗の会
バージョン :
権利関係 :



俳系における芭蕉の意義

平 島 順 子

はじめに

『綾錦』（沾涼編 享保十七年刊）、『俳諧家譜』（丈石編 宝暦元年刊）、『俳家大系図』（生川春明編 天保九年刊）等が公刊されたことから考えて、江戸時代には俳人の系譜に注意が払われていたことがうかがえる。本稿は芭蕉を俳系という観点からとらえ、その意義について考察を加えることを目的とするものである。

一 俳諧に古人なし

芭蕉は「俳諧に古人なし」及びそれに類する語を度々口にしていたようであるが、この言に関しては異なる二つの解釈が存在する。

(1) 「古人」に対して批判的な言と取る解釈

支考は『葛の忝原』（元禄五年刊）において

○「俳諧に古人なし」といふ事を、ばせを庵の叟、つねになげき申されしか。

(傍線部平島 以下同)

(井筒屋庄兵衛板 引用は大磯義雄氏校注『古典俳文学大系十 蕉門俳論俳文集』集英社 昭和四十五年九月による)

と述べ、さらに七年後の元禄十二年に公刊された『葛の忝原』の続編にあたる『続五論』^{ぞくごろん}においては

俳諧に新古あり。古は守武・宗鑑より貞徳・貞室のともがらにいたる。その後は難波の梅花翁ありて、しばらく胸次の理屈をはなれたるに似たれど、しかも言語の実なし。先師、よのつね俳諧に古人なしとなげき申されしは、むかしの俳諧に誰を師としまなぶべき風流なしとおもへるなるべし。

(井筒屋庄兵衛板 引用は大磯義雄氏校注『古典俳文学大系十 蕉門俳論俳文集』前出による)

と述べて「俳諧に古人なし」の言が意味することを「むかしの俳諧に誰を師としまなぶべき風流なしとおもへるなるべし」と「古人」にたいしての批判的な言であると明確に推量するに至っている。

この支考の認識は、『葛の忝原』が蕉門最初の、しかも芭蕉在世中に公刊された唯一の俳論書であったこと等から影響が大きかったらしく、夕顔庵風光編『宗祇戻』^{そうぎもどし}(宝暦四年刊 引用は柿衛文庫蔵本による)においては、桃青(芭蕉)の系譜の欄に「俳諧ニ無古人ト看破シテ蕉門一流建立之」と記され、石河石翠の評釈書『葛の松原評』においても

『詠歌大概』^{やうかたがい}に「和歌無師匠只旧歌為師」と。又『為弁抄』^{たふせんしょう}に「詩歌連哥には祖とうやまひ、師とあがむべき百世の古人は数多なるを今の俳諧といふ物ハ心は史記より傳へたれど、五七の言語にハ古人なしといはん」と。是守武・貞徳の風をしたはず、はせを一風を立たるの意よりかくいふ事むべならずや。

(寛政二年成 写本 引用は東京大学酒竹文庫蔵本により、適宜句読点等を補う。句読点等に関しては以下の引用も同)

と、芭蕉が守武や貞徳の風を慕わしく思わなかつたので、自己の独自の一風を立てたのだと、更に強く認識されるに至る。しかし、この考えに対してはまた反論も存する。

(2) 「古人」に対して批判的な意図はない言と取る解釈

元禄七年三月に去来は不玉からの来信に次のように答えている。

翁曰「俳諧に古人ナシ、只後世之人ヲ恐ル」

去来曰「古人ナシトハ古へ達人ナキノ謂ニ非ズ。然此道古人之姿ニ依テ作シガタシ。只日々流行シテ、日新ナリ。此故ニ古人ナキトヒトシ。又來者ヲ恐ル、ハ、今日各新味サガシ求ト雖モ、後世如何ナル人出テ目出度新味ヲ吐出サン。尤來者耻ベク恐ベシ、ト也。支考ガ『葛ノ松原』ニ誤テ此ヲ書シテ曰「俳諧ニ古人ナシト阿叟ハ泣給」ト云リ。我師何ゾ如シ此ノ高慢ノ語有ンヤ。常ニ宗鑑等宗因ニ至テ深ク貴ミ給事、人ミノキク所也。支考ガ説此ヲ聞誤カ。若筆頭ヲ誤カ。然モ宗鑑・守武以来、達人世ミニ乏シカラズト雖モ、此道ノ神ニ入事、只蕉翁ノミナラン。」

(引用は大内初夫氏校注『校本芭蕉全集第七卷』富士見書房 平成元年七月所収「不玉宛去来論書」による)

また、風国も『初蟬』序(元禄九年九月刊)において次のように述べている。

翁の常に「俳諧に古人なし」と申されけるハ、偏に古人なしとはあらず。先徳多が中にも「宗鑑あり、宗因あり、白炭の忠知あり」なんと慕ひ床しがられ侍りける。たゞ変化流行する所においてハ古人に拘るべき規則なしとなり。

(井筒屋庄兵衛板 引用は酒竹文庫蔵本による)

さらに二南斎智角『或問』（寛保三年写）においても次のような記述がある。

一、或云、我学処の芭蕉風は誹かいの伝なくとも道理有り。其故は芭蕉晋子に曰、「俳諧に古人なし。宜^シク自己の風流、蓋^{ガイ}天蓋^{ナリ}地^{ナリ}」とて言篇の誹の字を人べんに書かへたり。是を証とすべし。

予が云、芭蕉の誹かいに古人なしとの給ふは、誹かいは我はいかいにして先師の奴^{ヤツコ}とはならず。伝は其掟なれば、古今に貫通して守る物也と言ふ言也。俳諧に古今なく先師の風にか、はらざる、是を芭蕉の難有教といはん。伝法をみだるぞならば俳諧に表裏といふ事もなく、発句に切字と言ふ事もなく百員哥仙を己がま、にすべき事ながら、芭蕉とても此掟を守り給ふ事は書^ミにのする処の巻^マ発句にてしるべし。

（引用は鈴木勝忠氏編『翻刻俳諧伝書集私家版』平成六年三月による）

芭蕉が「古人」に対してどのように思っていたのか今となつては判断が難しいところであるが、支考の言葉が「先師、よのつね俳諧に古人なしとなげき申されしは、むかしの俳諧に誰を師としまなぶべき風流なしとおもへるなるべし。」と推量形であることより、芭蕉が直接「古人」を尊ばない旨の発言をしたものではなかったものと思われる。

去來は「常二宗鑑等宗因二至テ深ク貴ミ給事、人ミノキク所也。」と言ひ、風国も「先徳多が中にも『宗鑑あり、宗因あり、白炭の忠知あり』など慕ひ床しがられ侍りける。」と述べていることより、芭蕉が「古人」を尊んでいたことは事実と思われ、また後に述べるように、芭蕉は貞門の秘伝書である『大秘伝白砂人集』『俳諧新々式』『俳諧新式極秘伝集』を亡くなる一年ほど前の元禄六年三月に許六に伝授している。芭蕉は季吟の弟子であるが、晩年に至つても弟子に貞門の秘伝書を伝授していること等より考へて、伝統を重んじ古人を大切にすゝる気持ちを持ち続けていたものと思われる。季吟の『埋木』が大坂で客死した芭蕉の所持品中にあつたことも支考『笈日記』により知られるところである。これらのことより考えると、

この「俳諧に古人なし」という言葉は、去来らが述べているように、伝統は重んじながらも俳諧という道を求めるという点では「古人」の權威にいたずらに拘泥することなく新しさを追求していくという芭蕉の厳しい姿勢から出た言葉であると思われる、支考らが言うような「むかしの俳諧に誰を師としまなぶべき風流なしとおもへる」というような古人に対して批判的な意味の言ではなかったものと考えられる。

二 季吟と芭蕉

(1) 許六

芭蕉は貞徳の高弟である季吟の弟子であるが、そのことが当時どのようにとらえられていたのかをみてみることにする。

芭蕉晩年の門人である許六は、現存する自筆の『俳諧問答』^{注3}「俳諧自讃之論」の中で「初学の時季吟老人の流れに手引せられて」と述べ、季吟の流れを汲む俳諧から学んでいったことを明らかにし、さらに同書において

予ある所より、翁の自筆にて『白砂人集』^{はくさじんしふ}といふ物を得たり。対談の時此事いひ出して、あままし伝授を得たり。『埋木』^{うみき}は此『白砂人集』より出たり。連・俳の相違あり、微細なるもの也。『埋木』は季吟風を習ふ時、あまましき、伝へたり。『白砂人集』少々奥ニ記ス。此書、門人の中にも見ざる人あまたあるべし。

(引用は大内初夫氏校注『古典俳文学大系十 蕉門俳論俳文集』集英社 前出による。なおこの条は板本にはない)

と述べ、芭蕉から『白砂人集』という秘伝書を伝授されたことを述べている。

天理図書館綿屋文庫には『大秘伝白砂人集』『俳諧新々式』『俳諧新式極秘伝集』が三部一具として元禄六年三月に芭蕉か

ら許六へ伝授され、さらにその後正徳五年六月に治天へと伝授された旨が記されている許六自筆の伝書が現存する。書中には次のような記述が見られる。(引用は石川真弘氏・牛見正和氏「許六自筆芭蕉翁伝書」『ビブリア』七十五号 昭和五十五年十月による)

右一卷当家雖秘書依師弟之因不淺相伝之畢。努々外見有間敷候。

年号月日

長頭磨 在判

〔大秘伝白砂人集〕

自所持之書物相伝之申者也。

嵯元禄六癸酉春三月日

芭蕉翁 桃青 在判

森川氏許六雅丈參

右之秘書は、長頭磨より段々先師芭蕉翁相伝之連歌切字手爾於波之大事、此書に相究、尤俳諧かはる事なし。猥に金銀を以伝ふべからず。門弟執心の一兩輩に是を伝へ、世に残すべき也。題号の読くせ、口伝を以これを伝ふるもの也。仍如件。

正徳五年乙未夏

五老井許六 花

六月

法名菊阿仏書 押

雲茶店

森野氏治天丈參

〔大秘伝白砂人集〕

新式今案ノ之大事用ルコト連歌ニ多シ。今為メニ俳諧ノ用ルコトヲ拾ヒ集テ以テ名テ新々式ト為ス此ノ一冊ト。吾カ家ノ

大―事極^レ之ニ無^レ他、漫^リニ伝^レハ之ヲ可^キ蒙^ム和^二歌^一ニ神ノ御罰^ヲ者也。必ス莫^レ重^シト千金^ヲ、仍^テ如^レ件。

峇元禄六癸酉春三月日

芭蕉翁桃青

森川氏許六雅丈参

右秘卷は、先師芭蕉翁桃青より相伝之門人多候得共、是を見る人もなく、まして天下に相伝の人も猶なし。おもふ子細有之間、吾子にこれを附属す。我滅後十七年の後、是を披露すべし。必口外に出し候事無用たるべきの由、今二十余年に及ぶ。貴丈執心によつて是を伝ふ。金銀を以人に伝ふ事なかれ。門弟之中執心を見届け、一兩氏には伝之、世に残し置くべく候。当流一大事と申は、此秘卷に相極者也。猶切紙之義は、別に是を今相伝之畢。連歌新式今案は、連哥の大事にして俳諧の用少し。己俳諧要文ばかりこれをぬき出し、件の一卷となす。何方にても新式相伝と是を披露すべきもの也。仍如件。

正徳五年乙未夏

五老井許六

花

六月

法名菊阿仏書

押

雲茶店

森野氏治天文丈参

〔俳諧新々式〕

俳諧新式切紙免許之事

一 連哥新式相伝之後切紙といふ事相伝なき人は、新式相伝人わからず。新式相伝之人切紙迄伝受する人は稀也。はいかいも又如斯切紙を取て後新式之自由をはたらく事也。大事之秘決を残して切紙を伝ふに非ず。大事は悉新式に尽たり。新式伝受の人切紙なき内は自由をはたらく事ならず。俳諧新式切紙の免許、執心之上之執心之弟子に免之、子細口伝を以これを許す故不詳。

干時元禄六癸酉年春三月日

芭蕉庵

桃青在判

五老井

許六雅丈參

右俳諧新式全部之内縁起之卷、芭蕉翁より伝授之間、書写之令相伝者也。仍如件。

崙正徳第五乙未年夏六月日

五老井許六

法名

花

菊阿仏

押

印 印

雲茶店治天文參

〔俳諧新式極秘伝集〕

貞門の秘伝書を芭蕉が許六に伝授したことが知られる記述である。このことに關しては、先に引用した許六自筆の『俳諧問答』の記述、及び風之著『俳諧耳底記』の

翁に伝書なしといえども、許六にあたへられし『新々式』『白砂人集』あり。是は常に秘藏し給ふ今案の『新式』と『白砂集』のぬき書なり。

という記述により信すべき記載であるとされ、芭蕉から許六にこれらの秘伝書が伝授されたことは事実として認められている（村松友次氏『芭蕉伝書集二』解説 古典文庫 昭和五十九年八月。『校本芭蕉全集第九卷』所収荻野清氏・今榮藏氏「芭蕉年譜」富士見書房 平成元年十月にも採録）。

「初学の時は季吟老人の流れに手引せられて」俳諧に親しんでいた許六にとっては、季吟の弟子であつた師芭蕉は貞門の流れを汲む俳諧師として認識されていたものと思われ、だからこそその伝授を受けることに意義を見出していたと考えられる。許六にとっては芭蕉が貞徳の高弟である季吟の弟子であつたということは、大きな意味を持っていたのである。

(2) 桃隣

桃隣（晩年には桃翁と号す）は芭蕉の従弟（支考編『本朝文鑑』享保三年刊）といわれ、許六の芭蕉への入門を手引きした人物としても知られているが、自身が編にあたった芭蕉十七回忌追善『粟津原』巻末に次のように記している。

他所の手向種諸国の門弟いとなみ祭りて

枯なから芭蕉に四百八十寺

桃翁

誹祖松永逍遙軒長頭丸貞徳——北村拾穂軒再昌院法印季吟——松尾釣月軒芭蕉翁桃青居士——天野呉竹軒太白堂桃翁
寶永七庚寅之十月十二日

（引用は天理図書館綿屋文庫蔵本による）

桃隣は、師であり血縁関係にもあった芭蕉のことを貞徳——季吟——芭蕉と続く俳系に位置する俳諧師としてとらえており、かつ自身もそれにさらに連なるものであると考えていたことがわかる。『陸奥衡』（芭蕉三回忌追善 元禄十年刊）『粟津原』（芭蕉十七回忌追善 宝永七年刊）の二書の追善集を刊行する等、桃隣は師芭蕉を思う気持ちの強かった弟子である。従弟という血縁関係にあり師を思う気持ちの強かった桃隣にとっても、芭蕉が誹祖貞徳の流れを受け継ぐ季吟の弟子であったということは大きな意味を持つていたことがうかがえる。

(3) 二南斎智角

芭蕉は江戸に出てから不卜と親しく交際しており、不卜の弟子である立羽不角とも交流があった。不角の弟子の智角は自身（注5）が編んだ『はい諧水いらす』（注7）（宝暦四年刊）の序文においてその息、柳芳堂森角によって「予か父、久く風雅を楽み、貞

徳翁四世の老人にしたかひ学ふ事十八年」と記されている。「貞徳翁四世の老人」とは森角の父である智角の師であり、貞徳——未得——不ト——不角と続く、江戸における貞門の直系をうけつぐ俳諧師である立羽不角を指すものである。^注智角が編集した俳書の序文における記述であるので、智角及びその息森角は自分達を貞門の流れに連なる俳諧師であると考えていたことがわかる。そして智角は自身が著した『或問』（寛保三年写。引用は鈴木勝忠氏編『俳諧伝書集私家版』前出による）の中で「芭蕉門の教も予が師の教も元来互に正風の流れなれば異ならず」と述べている。不角における「正風」とは貞門を指すものであるが、^注智角は季吟の弟子である芭蕉のことを不角と同じ「正風」、すなわち貞門の俳諧師としてとらえていたことがわかる。

鈴木勝忠氏は「二南斎智角と不角派の蕉風接近」（『連歌俳諧研究』第八十六号 俳文学会 平成六年三月）において智角のことを「貞門末派」「古風によった」と認識されながらも、「芭蕉を担ぎ出して」「芭蕉に擦り寄るような形で新蕉風を説得しようとした」と述べられ、「総じて見れば不角もまたその方向を採っていたと見られよう」とされたが、これは従来からの不角に対する認識である、自派の勢力拡張のために芭蕉を利用していたという考え方を引き継ぐものであると思われる。しかし、智角は『或問』の中で次のように述べている。

- (1) 一、予曰、当世の誹人せう風といふ事は、芭蕉の蕉の字を用て蕉風といふと心得たる有り。正風とは詩経の国風の
一より言出て哥にも立花などにも正風という儀有るよし。しかれば芭蕉風の事にはあらず。すでに許六子が書る滑稽傳の一枚きせうの文中にも、発句の大事といふは正風体を宗とする也と見へたり。すべて風といふ物は其誹師其宗匠のかたよれるくせを風といふ。元来誹諧は新古の風なき事をしらず。あまつさへ近年の誹師の言しが、かれは貞徳風にて古しなど罵る有り。可笑。

- (2) 不角が故事故語を用るも全く芭蕉の教をうけて用るにあらず。

(3) 一、或問、名古屋の俳風は正風にや。

予が云、今の俳かいの風を考るに、かの江戸俳諧のしやれ風をいれず、能く聞る句をなす者多し。是名古屋のてがら也。正風といふは、詩経の国風の一といふより出たり。句は商南因南の詩の心也。身をおさめ家をおさむるの心術也。名古屋に多く俳かいを好て家を破る人有。然れば正風とも難決。大祖芭蕉は正風成事決せり。

右の『或問』の文中(1)「正風とは詩経の国風の一より言出て」、(3)「正風といふは、詩経の国風の一といふより出たり。句は商南因南の詩の心也。」というのは、不角著『統清匏』自序(延享二年刊)に

思へらく他の俳は時々易れ共正風の易ル事のなきをよしとす。ひとへに我好む処の風義許を貴しとするは得^レテ魚忘^レ筌^ヲ得^テ兔^ヲ忘^レ蹄^ヲとや笑はん。然れ共予か一念を笑ひるかへさんや。詩経ノ周ノ南商南を正風第一トす。右両ノ南縮^{ツメ}て予か舍^ノ号と成ス。凡正風の名目詩哥とともに離ルる事有へからず。予十三歳のとき一柳軒不^トに見其時は表徳遠山、是より不角と改ム。牙有^ル物は無^レ角^{難経ノ心ヲ以号ス}。それより七十余年此風義を不^レ棄、表徳ヲ不^レ改。

(引用は東京大学西竹文庫蔵本による)

とあることからわかるように、智角が師である不角の考えを受け継いで述べたものである。智角にとつての「正風」とは「芭蕉風」というようなせまい意味のものではなく、師不角が「十三歳のとき一柳軒不^トに見^テ」「それより七十余年」棄てなかつた風義である「貞門」の俳諧を指すものであると考えられる。そして季吟の弟子であり、師である不角とも交流をもつていた芭蕉は智角にとつては「正風」すなわち貞門に属する俳諧師として認識されていたのである。

(4) 祇徳

徂来学の影響のもとに俳諧の古学と蕉風への復帰を提唱する「古学庸道」を初めて説いたことで知られる祇徳であるが、彼は『俳諧句選』（享保二十年刊）の中で次のように述べている。

貞徳翁門人、立圃・重頼・西武・良徳・貞室・季吟、いづれも此人ミ今以て名ありといへども、野ミ口立圃は自己の門をかまへ、松江重頼は維舟と名をあらため晩年に至りては談林にくみしたり。西武『久流留』の功ありて、良徳に『天水』を賜ふ誉れあれども、その門人秀たるなし。尤貞室へ花のもとを譲りたまふ。貞室また貞恕に譲るといへど、貞恕のはいかい何ンぞ二師につづかんや。おしきかな貞室の家。こ、に季吟の家には芭蕉いで、談林をしりぞけ正風を起し中興開祖正風の翁と称しける。こ、を以て貞徳・季吟・芭蕉の三翁を俳諧三代の宗匠とあがめ奉る也。

（引用は白石悌三氏校注『古典俳文学大系十一 享保俳諧集』昭和四十七年三月による）

その後、貞享四年十月末にも芭蕉が伊賀帰郷の旅立ちに際して風交諸士から贈られた饞別雅章の手記を自筆のまま翻刻した『句饞別』（寛保四年刊）を祇徳は著すのであるが、『句饞別』の巻末には「三代宗匠之系」として、貞徳・季吟・芭蕉の略伝が付載されている。芭蕉の顕彰をしたことで知られる祇徳にとつても、貞徳——季吟——芭蕉という俳系は芭蕉を考へる際に無視することのできない、大切な認識であつたことが知られる。

季吟の弟子である芭蕉を貞門の流れに位置する俳諧師としてとらえらるゝと見え方は、高弟の許六や芭蕉と血縁関係にあつた桃隣を始め、当時の俳諧師には共通してあつた認識であつたことが知られる。

三 其角と芭蕉

俳諧師を遊女に見立てて評判した轍士著『花見車』（井筒屋庄兵衛板 元禄十五年刊）「江戸」の部において「桃青松尾屋の内にて第一の太夫也。」「國く^ニにてもこひわたるは此君也。」（引用は勝峰晋風氏編『日本俳書大系十五』）「俳諧系譜逸話集」春秋社 昭和二年五月による）と言われ、芭蕉の弟子の中でも第一の俳諧師であり、全国的にも人気があるといわれた其角であるが、其角と芭蕉とを俳系という観点から見てみることにしたい。

其角の弟子である淡々は、時々庵謂北へ伝授した『俳諧傳二書一卷』（淡々自筆 宝曆二年写）の奥書に次のように記している。

- (1) 這之一派從來之秘記其道恭^ク高^シ。貞徳、季吟、芭蕉翁、晋其角、四老師之風花雪月之一道深儀竊^ニ留^ム奥^ニ。其角翁桑榆愛^一憐^メ予^ヲ授^レ之。
- （引用は天理図書館綿屋文庫蔵本による）

また、淡々の弟子の田鶴樹は『俳諧之秘記』^{註10}（延享四年写）の奥書に次のように述べる。

- (2) 玉くしけてにをはの傳、蕉翁一派俳諧之秘記

右手^マ尔於葉は幽齋より貞徳に譲り、徳季吟に免之、吟より芭蕉翁に秘匣をひらく。蕉又其角に不殘授之、角前後始終淡々に譲る。此間に冠里公不殘清書写あり。其角三十三回一集清書之功^マにて不殘半時庵より予に息を傳ふ。今又讃州の門生、雪角一道深切之者也。仍以新に奥書を加えて授之畢。

延享四年
春三月中浣日

駿府
江霜庵

田鶴樹
[印] [印]

井月館

雪角丈

(引用は柿衛文庫蔵本による)

同じく淡々の弟子で、延享二年に淡々から点印と庵を譲られ、その後諸国を行脚した富天の、半時庵を継いだ記念の集である『民歌行』(寛延三年七月序)には次のようにある。

(3)

一派の傳系

御せいしんの君に来てあふや千代の春

花咲社
貞徳

竹の子ハみなそしなれや東坡か恵

拾穂軒
季吟

道の邊の木槿ハ馬に喰れけり

芭蕉翁
桃青

この木戸や錠のさ、れて冬の月

狂而堂
其角

清得舎富天に押花譲与雜の句

半時庵
淡々

汐凝て田なり家なり透聞風

清得舎

檜もあすハけふを夏山

富天

(引用は東京大学酒竹文庫蔵本による)

さらに淡々門であった丹波国の杜之原（百清舎杜原）のもとに伝わった淡々の書簡等をその息の白梅舎桃貫が模刻した『淡々自筆鑑』（寛政五年刊）には次のようにある。

(4) 俳諧之傳系

貞徳 季吟 芭蕉翁桃青——晋子其角——半時庵淡——百清舎杜原

（引用は愛知教育大学蔵本による）

淡々は其角の弟子であるので(1)～(4)で示された（幽齋——）貞徳——季吟——芭蕉——其角——淡々という俳系はその通りなのであるが、ここで問題となるのは其角が洒落風の祖とされていることである。洒落風とは「芭蕉七回忌を過ぎる頃から其角に顕著となり、沾徳に繼承され、江戸俳壇の主流となった俳風で、淡々・仙鶴の京移住により上方にも波及した」（白石悌三氏「洒落風」の項『日本古典文学大辞典 第三卷』岩波書店 昭和五十九年四月）ものであるとされるが、洒落風が江戸における貞門を攻撃した論難書である浮生著『滑稽弁惑原俳論』（宝永四年刊）、玉淵堂蟠龍著『俳諧とんと』（享保五年刊）の二書がともに岡西惟中の言説によっていることより、洒落風とは貞門に対する新風という点で、上方における談林と同じ性質を有するものであるといえる。^{注11} (1)～(4)の淡々系の俳書によって示された幽齋——貞徳——季吟——芭蕉——其角——淡々という俳系は、幽齋——貞徳——季吟という伝統を受け継ぐ貞門と、其角——淡々という江戸における新風である洒落風とが、芭蕉を介することによって一本につながったことを意味する俳系なのである。

其角は談林の俳諧師である西鶴が貞享元年六月五日に摂津住吉の神前において、一夜一日二万三千五百句独吟を行った折の後見を務め、元禄元年には西鶴宅を訪ねる（『西鶴名残の友』巻四の四 元禄十二年四月刊。野間光辰氏『刪補西鶴年譜考證』中央公論社 昭和五十八年十一月）等、西鶴と交流があったことが知られている。芭蕉は西鶴について

世上、俳諧の文章を見るに、或漢文を仮名に和らげ、或は和歌の文章に漢字を入、詞あしく賤くいひなし、或人情をい

ふとても、今日のさかしきくまゝ迄探り求め、西鶴が浅ましく下れる姿あり。我徒の文章は、慥に作意をたて、文字は譬ひ漢字をかるとも、なだらかに言つゞけ、事は鄙俗の上に及ぶとも、懐しくいひとるべし

『去来抄』「故実」 引用は大内初夫氏校注『古典俳文学大系十 蕉門俳論俳文集』前出による）

と述べたといわれているが、芭蕉の言は文章について述べたものであり、西鶴の人格を否定したものではない。芭蕉は常に「上に宗因なくむば、我くがはいかい、今以貞徳が涎れをねぶるべし。宗因は此道の中興開山也」（『去来抄』「修行」と述べていたといわれているが、この言が

魯町曰、「不易流行の事は古説にや、先師の發明にや」。去来曰、「不易流行の事は万事に渡る也。然ども俳諧の先達、是をいふ人なし。長頭丸以来、手を込る一体久しく流行し、「角樽や傾けのもふ丑の年」、「花に水あげてさかせよ天龍寺」といふ迄吟じつめぬれど、世人はいかいは如斯のものとのみ心得て、風を變ずる事をしらず。宗因師、一たび其こりかたまりたるを打破り給ひ、新風天下に流行し侍れど、いまだ此教なし。然りしより此かた、都鄙の宗匠達、古風を用ひず、一旦流ミを起せりといへども、又其風をながくおのが物として、時々變ずべき道をしらず。先師、はじめて俳諧の本体を見つけ、不易の句を立て、又風は時々に變ある事をしり、流行の句と分ち教へ給ふ。

という文章の後に続いているものであることを考えると、宗因が風を變じた事に対して芭蕉の評価の力点があつたものと考えられ、貞徳に対する非難の意図を見るべき言ではないと思われる。其角が就いた俳諧の師は芭蕉だけであるといわれるが、師である芭蕉が自身は貞門の高弟である季吟の弟子でありながら、俳諧が停滞することを嫌い新風である談林の祖である宗因を評価するような柔軟な姿勢をもっていたからこそ、其角もまた談林の俳諧師である西鶴とも気兼ねなく付き合うことができ、また後に「洒落風」と言われるような新風を自身が追求していくこともできたのではないかと思われるのである。

結び

上方においては、伝統的な貞門と新風である談林は激しく争ったが、ついに両者が融合することはなく、ともに停滞して行くことされる（楠元六男氏「俳諧論戦史」の項。『俳文学大辞典』角川書店 平成七年十月）。江戸においても先に述べたように『つげの枕』『滑稽弁惑原俳論』『俳諧とんと』に見られるような貞門対洒落風の争いがあるものの、それは上方における貞門対談林の争いに比すればはるかに小さいものであり、其角の撰集には「江戸という都市におけるあらゆる階層の人が結集されているというだけでなく、俳系においてもあらゆる派の人々が結集されている」（今泉準一氏『芭蕉・其角論』桜楓社 昭和五十八年四月）という現象が現れるに至る。そしてそれは新風である洒落風の祖其角自身が、貞門の高弟である季吟の弟子である芭蕉の俳系に連なるものであったことが大きく影響しているように思われるのである。

従来芭蕉はそのたぐい稀な句作の才能と、俳諧に対する真摯な姿勢によって評価されて来た。それはもつともなのではあるが、それに加えて上方では決して一つになることがなかった古風と新風とを江戸において俳系として一本につなげ、その結果江戸の俳壇を上方のように混乱させることがなかったという点からも評価されて然るべきではないだろうか。芭蕉が貞門の高弟である季吟の弟子であり、洒落風の祖である其角の師であったということは偶然などではなく、伝統を重んじながらも新風を追求して行くという芭蕉の不易流行を求める厳しい姿勢によってもたらされたものであったと思われるからである。

付記 本稿をなすにあたり、資料の閲覧でお世話になりました天理図書館、柿衛文庫、九州産業大学付属図書館にお礼申し上げます。

1 藤原定家著の歌論書。『日本古典文学大系六十五 歌論集 能楽論集』岩波書店 昭和三十六年九月所収のものによれば「和哥無二師匠」只以二舊歌一為師」とある。

2 渡部狂（支考）著『十論為弁抄』（享保十年三月刊）を指す。

3 島居清氏「許六自筆の俳諧問答に就いて」（『連歌俳諧研究』第三十号 俳文学会 昭和三十二年三月）。

4 拙稿「立羽^{たちば}不角論序説——貞門の俳諧師としての不角——」（『語文研究』第八十号 九州大学国語国文学会 平成七年十二月）。『国文学年次別論文集 平成七年版 近世分冊』学術文献刊行会に再録）において触れたことがある。

5 現在知られている、芭蕉と不卜との交流は次の通りである。（荻野清氏・今榮藏氏『校本芭蕉全集第九卷』富士見書房 平成元年十月所収「芭蕉年譜」をもとに作成）

・延宝六年夏 芭蕉に不卜亡母追悼の発句あり。

・延宝六年秋 不卜撰『江戸広小路』に芭蕉の発句十七、付句二十八集。

・延宝八年冬 不卜撰『向之岡』（現存零本二冊、四季発句の部）に芭蕉の発句九入集。

・貞享三年一月 「日の春をさすがに鶴の歩み哉」以下十七吟の百韻に芭蕉と不卜一座。他の連衆は其角・文鱗・枳風・コ斎・芳重・杉風・仙化・李下・拳白・朱絃・蚊足・千里・揚水・千春・峽水。さらに同時期、芭蕉はこの百韻の前五十韻に評注を加える（「初懷紙評注」）。

・元禄元年二月 不卜撰『続の原』四季の句合冬の部の判詞及び跋を芭蕉が書き、他に芭蕉の発句四入集。なお同書には「芭蕉庵にて／菊枯て蠕むく蟹の隣かな 不卜」の句が収められており、不卜が芭蕉庵を訪れたことがあることが知られる。

・元禄五年四月九日 不卜一周忌追善俳諧（琴風興行）に当たり芭蕉の発句あり。

芭蕉と不角との交流が知られる資料としては次のようなものがある。

・元禄元年二月 不卜撰『続の原』四季の句合冬の部「五番 網代」において判者芭蕉、心水（左）と不角（右）の句を持つ。

・享保十五年 不角編紀行文『木曾の麻衣』六卷粟津が原の箇所。

俳諧数寄る人、芭蕉翁の手向と見えて寺の障子に明間もなく発句を張付けたり。予もいにしへの馴染あれば

玉巻も哀魂巻芭蕉かな

不角

石碑に手向けて

先ツ月を得也清水一檜杓

壽角

正風の味ひは今もかはらず

涼しさよ同じ味有る手向水

辰角

・元文元年 不角編『百歌仙 江戸菅笠』

芭蕉或會に出て、十句言を二句して止ミぬ。人是を問。答て「悪^キ句を数鳴せんは栓なし。懷紙のあらんかざりは恥しき事也。」と。後世にと、まる物は和哥に過たるハなしと貫之も書り。今しやれを轉んして正風、芭蕉風とて和らかにしたつる風義専^ラ也。先以天元ノ一にかへりて可也。今の芭蕉風といへる句を考するに、古池やのはせをか句の一図と聞ゆる也。芭蕉は先變万化にてかたよらす。予も若年の時席につらなりしに

きやら焼しめて身をたしむ也

討死の日とて胃も着さりけり

と付て自讃也。いか様付肌、一句の働^キ今も面白し。又発句に

景清も花見の時は七兵衛

（引用は国立国会図書館蔵本による）

としられたり。是等の句にて味ひしるへし。唯けしき一種のミに限るへからず。(引用は国立国会図書館蔵本による)

この記述に關しては、不角の門人である二南齋智角著『或問』(寛保三年写。前出)に

芭蕉と我師との巻の中に、

きやらたきしめて身を嗜む也

討死の日とて甲も着ざりけり

芭蕉

此句を自賛せられしよし聞り。

とあることからわかるように、不角が詠んだ「きやら焼しめて身をたしむ也」という句に芭蕉が「討死の日とて胃も着ざりけり」という句をつけて自讃したという意である。

・寛保三年 二南齋智角著『或問』

ある時不角予(平島注 智角を指す)に語て曰、「誹かいは俚俗の物にして語はいやしくいひたつるとも、心をいやしく作るべからず。月花の句は陰陽の理を尊の義也。今日物々陰陽をはなれて行ふ道なし。仍芭蕉も三聖人の賛に

月花の是やまことの主ジ達

とはいへり。当世の誹かいは唯酒宴遊興の便にするのみ。一年芭蕉深川遊居の時、予に度々会して芭蕉の有さまを見るに、其容貌起^レ倫神色尤泰然たる人にて、句と容軀と合軀する故に名句多し。誹誹かいの聖なるべし。是を以今を見れば大に相違ず。容軀相違すれば心も又しかり。内に真あれば面背にあふる、といふは常をつ、しむにあり。誹諧は唯異風を好、行脚して世を渡る物と覺^ユへしは、此真理のいまだひらけざる物也。」といへり。

(引用は鈴木勝忠氏編『俳諧伝書集私家版』前出による)

右は『続の原』以外はいずれも『校本芭蕉全集』等に採録されていない資料なのであるが、注5に挙げたような不角の師である不卜と芭蕉との親しい関係を考えれば、芭蕉と不角との間に交流があったとしても不思議はないと思われる。

- 7 拙稿「二南斎智角編『はい諧水いらす』翻刻と解題——不角の弟子の撰集——」（『文献探究』第三十五号 文献探究の会 平成九年三月）。
- 8 沾涼編『綾錦』享保十七年、生川春明編『誹家大系図』天保九年による。智角編『或問』寛保三年によれば貞徳——玄札——未得——不ト——不角。
拙稿注4。
- 9
- 10 『誹諧傳二書一卷』『誹諧之秘記』を芭蕉の伝書としてよいかどうかについては問題がある。（調雅子氏「正木風状所伝『貞徳翁誹諧秘伝書』について」『女子大国文』第二十三号 京都女子大学国文学会 昭和三十六年十月。森澤多美子氏「淡々と地方俳壇——紀州の場合——」『国語国文』第六十五卷二号 京都大学文学部国語学国文学研究室 平成八年二月）。
- 11 拙稿注4及び拙稿「『俳諧とんと』翻刻と解題——不角に対する論難書——」（『雅俗』第三号 雅俗の会 平成八年一月）。